

久米邦武の仏教観

——スリランカの仏教寺院訪問を中心に——

西 田 みどり

一 はじめに

岩倉使節団の公式報告である『特命全権大使米欧回覧実記』（以下、実記）を執筆した久米邦武（一八三九—一九三一）は、全百巻（本にして五冊）に及ぶ長大なこの報告の中に不思議な一節を書き残している。それは錫蘭島（現スリランカ）本稿では以後スリランカを使用する^①）訪問時の記述である。題名からも明らかのように、この記録は「米欧」、つまりアメリカとヨーロッパの視察報告である。岩倉使節団の目的は、米欧の發達した文明を吸収し、植民地支配されない近代国家を建設するための情報収集であった^②。当時の日本が何より懸念していたのは植民地支配されることである。キリスト教奪国論は根強く、岩倉具視は特にそのことを懸念していた^③。そんな中で久米に課された使命が、「宗教取調べ掛り」である。明治四年（一八七一）、アメリカ号が横浜港を出発して最初の訪問地アメリカへ向かう船の中で、突然命じられた。久米はこの役割について後年「どうも宗教は実は迷惑な事と思ふたけれども仕方が無い^④」と、そのときの気持ちを吐露している。当時の久米は宗教を「淫祠」だと考えていたからである。それはキリスト教に対してだけでなく、神道や仏教に対しても同様であった。岩倉のように、神道を西洋でのキリスト教に代わ

るものとは見ていなかった。岩倉は「皇漢学者」にこだわって久米を選んだわけだが、久米自身は神道家ではなく無宗教であり、むしろ宗教嫌いであった。その久米が、スリランカに上陸したとき、二つの仏教寺院を視察し、その訪問で見たことを実記に記述している。

ここで二つの疑問が生じる。一つは、スリランカで「宗教取調べ掛り」として視察をしていること、もう一つはそれを実記に書いていることだ。

スリランカは当時イギリスの植民地であり、日本のモデルとなる国ではなかった。そればかりか一五〇五年以来、植民地支配され続けている。前述したように宗教取調べ掛りの仕事は先進国における宗教の役割を観察して近代化の参考にするためである。スリランカは先進国ではなかったし、しかも植民地であった。二重の意味で日本の近代化には参考にならない国だった。

もう一つの疑問は実記に仏教寺院訪問を記録していることだ。確かに視察自体は行ってみないとわからないという点はある。しかし記録となると参考になるか否かが判断基準になる。住民は無欲で淡泊な生活をしている、僧侶はそれ以上であるという記述が近代化を目指していた日本の参考になるとは思えない。なぜ久米は記録したのだろうか。また、スリランカ訪問は久米に何をもちたのだろうか。その答えを求めて、二〇一三年八月、スリランカを訪問して久米の足跡をたどった。そのご報告をしながらこの問いを追究していきたい。が、その前に、久米が「西洋」との比較の基盤として頻出させる「東洋」について考察しておく。

二 久米にとつてのふたつの「東洋」

二・一 久米の「東洋」——幕末佐賀藩の科学技術導入

久米の比較の視点には瞠目すべきところが随所にある。特に「東洋」と「西洋」の比較については、なぜ明治五、六年の時点でこんな視点で観察できたのか感嘆させられる。例えば、「ガラシールス」の羅紗製造工場を視察したとき、蒸気機関で動くいくつもの機械によって羊毛が布へと織られていく機械化した工程を見て、機織り機を使っている国から来た久米が、このような機械化は大したことはない、能力の差ではなく生きる価値観が異なるから機械化が進んだのであって、五〇年もすれば日本もこうなっている、と言い切る。

また、こんな記述もある。

「東洋西洋ハ開化ノ進路ニ於テ、已ニ甚タシキ隔絶ヲシタルニ似タレトモ、其実ハ、最モ開ケタル英仏ニテモ、コノ盛ヲ致セルハ、僅ニ五十年來ノコトニスクス、世界ニ、開化ニ後レタル国ハ猶夥多シク、……」

東洋と西洋を比較すると近代化において大変な隔絶があるように見えるがそんなことはない、その実は、最も近代化が進んでいる英仏にしても、近代化による繁栄はここ五〇年来のことにすぎず、世界には近代化が後れている国がもつとたくさんある、という見方をしている。

久米の言う「東洋」とは何を指すのだろうか。明治初期、幕藩体制から中央集権に移行したばかりの日本にはまだ共通した「日本国」のイメージはできていない。明治政府内部も藩単位での勢力関係で構成されていた。また、当時のアジア情勢から考えて、アジアを実記でいう「東洋」と考えるのは無理がある。

この「東洋」が幕末佐賀藩であると考えると、久米の比較の見方の理由が解明できる。佐賀藩きつての秀才であった久米は、先進的な藩主・鍋島直正の近侍として、直正の西洋の科学技術導入過程をつぶさに観察していたからである。幕末佐賀藩を基準とすれば、強気とも見える久米の比較記述は実は論拠のある観察に支えられたものだと思える。

直正は、西洋の科学技術導入を、精煉方という理化学研究所を設立して、そこで研究に当たる人材を藩外からヘツドハンティングしてくるという方法で推し進めている。ヘツドハンティングの任に当たったのは、日本赤十字社を設立した佐賀藩士・佐野常民である。佐野は嘉永四年（一八五二）、伊東玄朴の象先堂を退塾して帰藩する途中、京都で四人の科学者に会い、佐賀藩に連れ帰っている。『佐賀藩海軍史』にはこの経緯がこう記されている。

「江戸留學中大患に罹り（嘉永四年）姑く病後の身を休養し次て長崎に轉遊す其途中京都に過く時蘭學化學器械等を以て有名なる中村奇輔其他三名を誘ひ佐賀に歸着し之を閑叟公に薦む⁵」

京都で、蘭學に長け、化学、機械工学の研究者として有名な中村奇輔、ほか三名を佐賀藩で仕事しないかと誘って連れ帰り、直正に登用を勧めた。直正は佐野の推薦にすぐに応じたというのだ。

「公、化學者中村奇輔西洋器械師田中久重、同儀右衛門蘭學者石黒寛次等諸氏を採用して悉く藩籍に列せられ精煉局を創立して之に精煉方を命せらる此に於て蒸氣船蒸氣車等の雛形を製して之を此事業の略々緒に就くを見て長崎に到る⁶」。

直正は四人を採用して藩籍に列し、精煉局を創立して迎え入れた。ここで「蒸氣船蒸氣車」などの雛形、つまりミニチュア版を造らせたりした。佐野自身はこうした事業が緒につくのを見届けてから長崎に行き家塾を開いた、という。

四人の科学者の中に「からくり儀右衛門」の名で知られる田中儀右衛門久重も入っている。引用した「西洋器械師田中久重」が「からくり儀右衛門」のことで、続く「同儀右衛門」とは養子の二代目田中儀右衛門を指す。親子で招聘され精煉方では久重の片腕として力を發揮した。

直正はからくり儀右衛門を一代武士として取り立てると、「蒸氣船」や「蒸氣車」等の雛形製造を経たのち蒸氣船を建造させている。蒸氣船建造に着手したのが文久三年（一八六三）、竣工は慶応元年（一八六七）である。わずか四年で完成していることになる。『佐賀藩海軍史』には「慶應元年三重津製造所にて竣工、本邦に於て製造せし最初の蒸氣船なり藩公近海御召船⁷」という記述があり、直正が竣工したばかりの蒸氣船・凌風丸に乗ったことがわかる。

幕末に藩自前の軍艦を建造したのは四つの藩だけである。

また、儀右衛門とともにヘッドハンティングされてきた化学者の中村奇輔は電信機を実用化しているし、やはり佐野にヘッドハンティングされた石黒寛次は佐賀藩が購入していた膨大な洋書の翻訳を一手に引き受けている。石黒が翻訳したものは現在「精煉方研究調書原本訳書」として佐賀県立博物館に保存されている。

こうした経緯を久米は間近で見ているのである。追いつくのは五〇年という見解は、からくり儀右衛門が、蒸気船建造を、精煉方に入った嘉永四年から数えても慶応元年までのわずか一六年間で完成させたことを考えると、遠慮した見積もりと言ってもいいくらいある。久米は皇漢学者の視点で佐賀藩の「近代化」を見ていた。実記における「東洋」の基盤には、久米の国学と漢学の学識と、佐賀藩の科学技術受容過程の観察が深く関係している。

二・二 久米の「東洋」——スリランカ体験

さて、もうひとつ、久米の見方の根拠としてあげたいのがスリランカ体験である。前述したように久米のスリランカでの行動は奇妙なものである。久米の仏教観は出発前と以後では大きく変化しているのだが、そのもとなつたのがスリランカである可能性がある。

実記では「西洋」と「東洋」の比較として以下の六点を挙げている。⁸⁾前者が「西洋」、後者が「東洋」である。

- ①有形と無形
- ② 済生の道と高尚な理論
- ③ 理系の学問と文系の学問
- ④ 起業と哲学研究
- ⑤ 〈科学技術で便利な生活を〉と〈科学技術は贅沢を生む邪なもの〉
- ⑥ 日常生活に利便性を求める・求めない。

久米はこれが科学技術を日常の利便性に特化して発達させるか、反対にむしろ不便さの中に暮らすかの分かれ目になっているという。この六点の中の、①有形と無形、②済生の道と高尚な理論、⑥日常生活に利便性を求める・求めないの「東洋」は、幕末佐賀藩より、スリランカの人々の生き方に近い。前章で紹介した久米の強気の見方を支えたのは佐賀藩の科学技術力であるが、東洋の精神性となると佐賀藩よりスリランカで見えたものの影響を考えたいほうがしっくりくる。滞在はわずか三日間であったが、一年八カ月の米欧視察ののち、無欲恬淡の中で穏やかに暮らす人々を見た衝撃は心に残ったのではないだろうか。

現在のスリランカに久米の足跡を辿っていくことで、久米の心の変化に寄り添いたい。辿りたい主たるものは教会と寺院である。スリランカは仏教国であるから、寺院は一四〇年前のものでも残っているだろう。またイギリスの支配は一九四八年まで続いていたから教会もそのままであろう。その予想の下に久米が歩いたゴール市街とその周辺を視察した。実記での記述を紹介しつつ、比較しながら報告したい。

三 スリランカに久米の足跡を辿る

三・一 キリスト教、回教、仏教が共存

久米のスリランカ滞在は明治六年八月九日から一日までである。ゴール港に着いたのは午後三時だった。実記のスリランカ訪問は以下のような記述から始まっている。

「九日、晴、午後三時ニ錫蘭島ノ『ポイント、デ、ゴール』港ニ著シ、錨ヲイレ、即チ上陸シテ『ホテル、オリエンタル』ニ宿ヲ定メ、馬車ニテ『チャイナガーデン』ノ浮屠『アトミタミヒアール』寺、『ポーカハバット』伽藍ニ至リ、帰路ニ近郊ヲ散駆ス」^⑤

午後三時にゴール港に着き、ホテルオリエンタルにチェックインすると、馬車で「チャイナガーデン」にある二つの寺院を訪ねたという。「チャイナガーデン」について現地を調べると、ガーデンとは農場を指し当時中国人が一人で農業を営んでいたのでもう呼称されていたのではないかとのことだった。現在は「チャイナガーデン」と呼ばれる地域はなく、ただチャイナタウンと呼ばれているところはあった。幹線道路から脇道にせれると家や商店が立ち並んでおり、はつきりした区域ではないが、そのあたりがチャイナタウンと呼ばれているという。恐らく当時の名残なのであろう。

午後三時にゴール港に着き、ホテルにチェックインしたのちに出発して帰路に近郊を散歩できたくらいであるから、仏教寺院はそれほど遠くはなかっただろう。手がかりは「アトミタミヒアール」寺、「ポーカハバット」伽藍である。実記を通して言えることなのだが、久米は現地で聴いた音をそのまま写して外国の地名や事物を書く。したがって、今の私たちには発音をそのままカタカナで書いた言葉が何なのか、突き止めるのは難しい。

ゴール近郊で午後三時から行ける寺院、が目安である。名称はこの音に近いものということになるが、これについては実記の現代語訳を行った水澤周氏が「アタパトゥ・ヴィハラ寺院」「ボナヴィスタ寺院」としている。このカタカナ表記も参考にしながら久米の訪ねた寺を探した。最も信頼性のある一致は言うまでもなくご本尊である。まずゴール市街地の宗教関連の建物や行事を久米はこう書いている。

「此比ハ仏教孟蘭盆会ノ期ナルユヘニヤ、海岸ニ椰ニテ、施餓鬼棚ノ如キモノヲ作りタルヲミル、欧洲ヲ離レテヨリ、回教ノ地ヲスキ、又此ニ来レハ、土人ニ種種ノ風俗教習ヲミル、益世界ノ奇ヲ覚フナリ」^⑩

孟蘭盆会の時期なので海岸に施餓鬼の棚を作っていたのを見たという。船が港に着いたときの観察である。それに続いて、行く先々で宗教的な行事に出会い世界は不思議だと思つたと感想が書かれている。日本を発つたとき、宗教は淫祠だと言っていたことを思えば、ただ淡々と受容しているのは、久米の見方が変わったことの証であらう。

「英吉利宗ノ寺アリ、蘇格風ノ造営ニテ、頗ル美観タリ、道路ハ磴石ナシト雖モ、修掃ヨク至ル、(中略)、又回教

ノ寺モアリ、仏教ノ寺ヲミサレトモ、此地ノ大半ノ民ハ仏教ノ民ナリ」

この記述で注目しておきたいのは、教会と回教寺院と仏教寺院が共存していることを久米が書いていることだ。一般的に、書かれるのはめずらしいことで、当たり前のことは書かれない。キリスト教が禁止され、信仰すると投獄される日本から来た久米にとって、三つの宗教がそれぞれ禁止もされずに存在をしているのはめずらしいことだったに違いない。

しかも、大半の人々が仏教徒であるというのだから、ますます不思議であつたろう。植民地であつても、現地の宗教を無理やり改宗させていない。

久米は現地の人に、なぜキリスト教に改宗しないのかという問いをなげかけている。

「巡回途上ニテ試ミニ土人ニ問フ、現今ハ歐洲ノ属地トナリ、『ゴール』ニ基督教ノ寺モ多ケレハ、何ヲ以テ彼教ニ変宗セサルト言ヘハ、曰ク是我父祖ヨリ世世此教此教ヲ信向ス、我世ニ至リ、之ヲ変シテ他教ヲ守ル、抑抑何ノ益カアルト答ヘタリ」

久米はこの答えに対して「本ヲ忘レスシテ、旧法ヲ守ルノ心ハ、嘉スヘキニ似タリ」と肯定的に受けとめ、その後どうやって祈るのかという問いまで発している。彼らは、跪いて祈るのだとそのポーズをとってみせ、念仏や呪文を唱えることはなくただ黙って祈るのだと答えたという。なぜ久米は祈り方まで訊いたのか。米欧の宗教取調べ掛りという任務を離れた宗教への研究心と観察がここに見て取れる。このような人々を久米は、生活は淡泊で無欲であると述べ、僧侶に至ってはさらに無欲であると観察している。米欧の近代化に向けてのぎらぎらした世界を観察し続けてきた久米にとつて、人々の無欲な淡々とした生活ぶりは強烈な印象を残したのではないだろうか。

さて、久米によると寺院は二つだけだったという。ご本尊を手掛かりに現地で見つけた寺院をご報告していく。

三・二 「アトミタミヒアール」寺

実記にこう書かれている。

「垣ヲ匝シ、其ノ中ニ瓦葺ノ小堂アリ。造営頗ル精ナリ、守人錠ヲ開ケハ、中ニ釈迦趺坐ノ像ヲ安セリ、其相貌恰モ我邦ニ伝ヘテ刻スル相貌ト異ナルナシ、……是ニテ仏像ノ刻法ハ、来歴アルコトヲ知ラレタリ、像ノ前ニ白石ヲ以テ刻ミタル、両弟子ノ像アリ」¹³

ゴール市街地から出発して近い場所から順に、ご本尊を手掛かりに寺院を巡った。三つ目にたどり着いたのが「アトミタミヒアール」寺だと思われる「TAPATTU WALAWWA」であった。前述したように水澤氏は「アタパトゥ・ヴィハラ」という音を充てている。ここに「中ニ釈迦趺坐ノ像ヲ安セリ、……像ノ前ニ白石ヲ以テ刻ミタル、両弟子ノ像アリ」がお祀りされていた。

「TAPATTU WALAWWA」は現在、英国人の医師が所有する屋敷で、寺院はその屋敷に併設されている。所有者が変わっているのです、その間の事情を現在の所有者に尋ねても、わからないとのことであった。屋敷はエアコンを使用しなくても涼しさが保てるという造りで、現在の所有者の関心はもっぱらその点にあり、寺院の来歴についての質問には首をすくめるばかりだった。訪問の目的を告げ、寺院の場所を尋ねると、使用人のスリランカ人に案内させるというところで、ようやく寺院に行くことができた。屋敷の表門の横に延びる細い道を百メートルほど行くと七段ほどの階段がある。そこに「垣ヲ匝シ、其ノ中ニ瓦葺ノ小堂」があった。しかし、改修工事中で「造営頗ル精ナリ」とはとても言えない古い建物だ。黄色い衣を着けた僧侶がいたので尋ねると、やはり寺の来歴は知らないという。ただ古いものであること確かだということだった。ご本尊にお参りしたいとお願いすると快くもう一つの建物に案内してくれた。

ご本尊にはだれでもお参りできるわけではなく、本堂には錠がかかっていた。「守人錠ヲ開ケハ」のとおり、僧侶が錠を開けてくれ、ご本尊と対面できた。「中ニ釈迦趺坐ノ像ヲ安セリ、其相貌、恰モ我邦ニ伝ヘテ刻スル相貌ト異

ナルナシ」であつた。釈迦像を安置した内陣にはベールのような白いレースが幕のように垂らされている。これはスリランカの習慣なのか、他の寺院でも、最も貴重な仏像を安置した内陣の前にはレースの幕が垂らされていた。「像ノ前ニ白石ヲ以テ刻ミタル、兩弟子ノ像アリ」についてもそのとおりであつたが「白石ヲ以テ刻ミタル」については確認できなかった。仏像が彩色されていたからだ。ゴールで巡つた寺院ではどこも仏像は彩色されていた。久米がそのことを実記に記さず、むしろ日本と相貌が違わないと言つてゐるのは不思議であるが、日本の仏像の中にも彩色が施されているものはあるので、そのためかもしれない。もとより日本の仏教には久米はそれほど詳しくない。

この寺院についての記述で不自然なのは、この堂の前に円塔がありそれが歐洲風の建物で、仏舍利が収められてゐるという部分である。実際の「アトミタミヒール」寺には仏舎利の納められた円塔はなく、それがあるのは「ボーカハバット」伽藍のほうであつた。一四〇年の年月が経つてゐるので変化してゐて当然ではあるが、事が仏舍利塔であれば、久米の勘違いという可能性もあるかもしれない。現在、この寺院は寂れてゐるように見えた。寺院の周囲は未舗装でこぼこの細い道が広がつてゐる。しかし、メイン道路まで出ればゴール市街からそれほど離れてゐるわけではない。

次に向かつたのは「ボーカハバット」伽藍である。

三・三 「ボーカハバット」伽藍

実記にはこう記されている。

「是ハ瓦ヲ葺キタル堂ナリ、此内ニ釈迦涅槃ノ巨像アリ、長サニ丈余ノ臥像ナリ、其面貌ハ、前寺ノ像ニ同シ、右ヲ袒キ、其手ヲ曲ケテ頬ヲ支ヘ、両足ヲソロヘテ展臥ス、左肩ヨリ足ニ至ルマテハ、黄色ノ袈裟ヲツク、袈裟ノ表ハ、鱗紋ヲ刻ミ、頗ル埃及風ノ細工ニ似タリ、其周壁ニ画キタル、天堂地獄ノ図ニ至リテハ、純乎タル埃及ノ画法ナリ……此背ニ二堂アリ、堂側ニ釈迦ノ分骨（或云爪也）ヲ葬リタルトテ、石ヲ以テ上ヲ匝ヒ、壇ヲ築キ、上ニ一株ノ

菩提樹ヲ植タリ¹⁴

この寺院について水澤氏は「ボナ・ヴィスタ」という音を充てている。スリランカで「ボーカハバット」と「ボナ・ヴィスタ」双方の名前の寺院があるかどうか調査したところ、前者はない、後者については固有名詞ではなく「美しい眺望」という意味のスペイン語ではないかと言われた。寺が景色のよいところであり、それが通称だったのではないかと言うのだ。そこで、ご本尊が釈迦涅槃像で景色のよいところに建てられた寺という条件で探した。

恐らくこれだろうということで見つけたのが「Vijayanda Pirivena」である。「是ハ瓦ヲ葺キタル堂ナリ」とあり、それが目印となった。この建物は少なくとも一八八〇年にはここに建てられていた。一八八〇年にスリランカに來たヘンリー・ステイル・オルコット（一八三二〜一九〇七）がここで講義をしたからである。建物の中にはオルコットの銅像があり、また壁には胸像が飾られている¹⁵。久米がこの地を訪れたのが一八七二年である。オルコットの講義が古利で行われるのは自然なことであるから、久米が訪れた寺院だと考えても差支えないだろう。何よりこの寺院のご本尊は釈迦涅槃像なのである。

「Vijayanda Pirivena」寺院に着き、僧侶に面会を申し込むと、食事中ということであった。広大な境内に仏舍利塔と本堂がある。歐洲風の建物で色は真っ白だ。特に円塔の仏舍利塔はひときわ目を引いた。

境内の様子をカメラに収めていると、カレーのにおいを残したまま羅漢のような僧侶が現れた。来意を告げると、すぐに本堂に案内してくれた。そこに釈迦涅槃像が祀られていた。「右ヲ袒キ、其手ヲ曲ケテ頬ヲ支ヘ、両足ヲソコヘテ展臥ス、左肩ヨリ足ニ至ルマテハ、黄色ノ袈裟ヲツク、袈裟ノ表ハ、鱗紋ヲ刻ミ、頗ル埃及風ノ細工ニ似タリ」のままである。釈迦の顔はエジプト風である。本堂をぐるりと巡るように「天堂地獄ノ図」がレリーフで描かれている。そしてさらに、「此背ニ一堂アリ、堂側ニ釈迦ノ分骨（或云爪也）ヲ葬リタルトテ、右ヲ以テ上ヲ匝ヒ、壇ヲ築キ、上ニ一株ノ菩提樹ヲ植タリ¹⁶」とあるように、本堂の背後にもう一つ建物があり、それが仏舍利塔であった。久米來訪時に仏像が祀られていたのが瓦屋根のオルコットが講義していた建物であれば、背後という言い方ができるかもしれ

ない。ただ、現在の仏舍利塔はたいへん立派な建物なので建て替えられた可能性はある。

僧侶は一室に招き入れて椰子の葉に書かれた古文書を見せてくれた。またオルコットゆかりの品もあった。断定はできないが、ご本尊から推察すると久米が訪れたのはこの寺院ではないかと思われる。

以上、久米の足跡を辿ってスリランカの仏教寺院を巡ってわかったのは、仏教の精神が現在でもまだ生きていているということだった。僧侶は親切であり、質問には真摯に答えてくれ、喜捨の要求は一切なかった。賽銭箱もなく、喜捨するためには、どこにそのような箱があるのか訊かねばならないくらいだった。反対に、僧侶がお守りとして手に糸を巻いて道中の無事を祈ってくれたり、キャンディをくれたりした。もちろんお金は要求されない。それは日本人だから特別にということではなく、他の参拝者にも同様に對していた。久米の訪ねた時期は「民ノ生活已ニ淡泊ナレハ、僧ノ生活尤モ淡泊ナリ」とあることからすると、今より仏教的であつたらう。

現在のスリランカは近代化が進み「お金」が生活を支配し、多くの人がお金を追いかけるようになったという。今回の訪問でお世話になったシンハラ語通訳のTさんは「昔の生活はお金がかからなかった。今は何をするにしてもお金。みんなお金を追いかけるようになった」と言う。恐らく一四〇年前はさらにお金のかからない生活だつたらう。欧洲との雰囲気の違いは歴然だつたのではないか。それが久米の仏教観に影響を与えた。このことについて思想的変遷からさらに深く考えていきたい。

四 仏教観の変遷

米欧回覧の一年九カ月は久米にとって緊張感と繁忙の日々だった。その忙しさを久米はこう描写している。「…瀧

車其都二達シ、僅ニ笈ヲ『ホテル』ニ弛ムレハ、回覧即チ始ル、昼ハ輪響瀛吼ノ際、鉄臭媒氣ノ間ヲ奔ル、烟埃満身ニテ、暝ニ及ヒ方ニ歸レハ、衣ヲ振フニ違アラス、宴会ノ期已ニ至ル、威儀ヲ食案ニ修メ、耳目ヲ観場ニ倦ラシ、子夜ニ寐牀ニ就キ目ヲ覚セハ、製場ノ迎伴人已ニ至ル……」

実記の日付を追うとその日程が詰まっていることに驚かされる。汽車が訪問地に着きホテルで荷を解くとすぐさま視察が始まり、工場などを視察して埃だらけになってホテルに帰っても、その埃をはらう間もなく宴会の時間になる、その後観劇して夜中にベッドに入り目が覚めるともう次の視察地の迎えが来ている……という。何しろ「特命全権大使」の訪問であるから視察への招待状が束になって届き、イギリスでは招待された九割は行くことができなかつたという。ヨーロッパに別れを告げるまでそんな日々が続いていた。帰路についたとき、恐らくほつとしたのではないだろうか。もちろん実記にはそんなことは書かれていない。ただ淡々と見たことが記述されている。

二年近くも他国を回覧してものの見方が変わらないはずはないが、ここでは仏教観に焦点を絞って時間順序で見えていきたい。あとで本音を明かしている場合もあるので、論文が書かれた時期ではなく久米の本音の時期を重視して記述していく。もちろんすべてを網羅できるわけではない。実記との関連に軸足を置く。

出発前の仏教観（宗教観）は「淫祠」であつた。それが書かれているのは論文「神道の話」である。「神道の話」は明治四一年に『東亜の光』（第三卷第五〇号）に発表された論文で講演録の体裁で書かれている。ここで久米は自分には宗教などという高尚な知識はないと謙遜しつつ、自分個人の考えだがという限定で語っている。目を引くのは「この宗教といふことは私は世界の事はよく分らないが、私丈だけで之を考へると私が一生の前半生と後半生と思想が余程違ふ……」と述べている点だ。前半生の仏教観について「其頃の宗教といふものは一体淫祠臭いもので、マア学問でもする者は馬鹿々々しいこと、思ふてゐた。是は私に限らず明治以前の者はマアそんな心であつた」とし、続けて「然るに段々迷信といふ言葉の発生する時分より、宗教といふものは非常な貴重なものといふ事に人の前では云はなくてはならぬ様な訳になつてきた。事によると宗教を臭す事を云ふと甚だ悪い事に認めらるゝ世の中になつたの

です」。

「迷信」という言葉はかつてはなかった。その言葉が出てきたころに、宗教を貴重なものだと言わなくてはならなくなつた、さらに宗教を悪く言うことはたいへんよくないこととなつた、というのだ。宗教に対する世間の振る舞いが明らかに変わつてきている。ただ、建前という側面もあるようで「人前では」という但し書きがついている。したがつて、「私の一生の前半生と後半生で思想がよほど違つた」と言いつつ、「違つたけれ共矢張り元の思想が随分まだ支配して居るやうな考もあるのです」ということになる。

微妙な言い方であるが、明治政府が宗教を重要視し始めたため、宗教は淫祠だなどは公言できなくなつたということだろう。この時点での久米は、仏教に限らず宗教に対して批判的である。

明治四年、岩倉使節団が最初の訪問地であるアメリカに向かう蒸気船アメリカ号の中で、アメリカで宗教は何かと訊かれたらどう答えようかと話し合つている場面での久米の仏教観は、「仏教信者であるとはどうしても口から出ない。どうも仏教はよく知らないから、アトを聴かれると二の句がつげぬ。仏教は困る」というものである。これは久米に限らず、その場にいた福地源一郎や田辺太一の総意である。「口から出ない」のは仏教を淫祠だと思つているからで、「アトを聴かれると二の句がつげぬ」は仮に仏教の教義について質問されたら説明できない、つまり仏教をまったく勉強していない。いかに当時の元武士階級が仏教から離れていたかが推測できる。

その原因について明治二六年の論文「史学の独立」で、僧侶が怠つていたからだと指摘している。まず自身が仏教にいかにか縁が薄いかについて「私は禪宗であるが、父祖より五、六代、帰依寺より説教を受けた事もない。婦人も珠数を爪練つた事もない。外の家々も大抵其通りである」とし、続いて「武士は宗教心に薄いので、政治も武士道もあつて徳義を維持したれど、畢竟僧徒の怠りといふは免れぬことで、現に僧徒も怠りであつたと言つて居ます」と言つ。確かに父祖より五、六代、帰依寺から説教を受けたことがなければ、仏教を知らないのは当たり前で、武士階級の徳義を支えていたのは忠孝仁義ということになるのだろう。忠孝仁義は先に紹介したアメリカ号での宗教談議で自分た

ちにぴったりくる徳義として挙げられている。

さて、実記に戻って、明治五年、アメリカでバイブル社を訪れたとき仏教に対するこんな記述が出てくる。

「僧侶ノ仏典ニ於ル、一般ニ其戒ヲ守リ、其規ニ服ス、儒者ト異ナリ、然トモ僅々ノ經典モ、其何ノ謂ナルヲ知ルモノハ、百人ニ二三人ヲ得テ止ム、亦何ソ人ニ教フルニ足ラン

信徒ノ如キハ、念仏呪禱、タゞ情欲ニ驅ラルヽノミ、然則立教ノ美惡ハ且舎キ、其品行ノ人民ニ著ルヽ度ヲ論スレハ、世界ノ最下等ニオルト謂モ、恨ミナカルヘシ……（以下略）」

僧侶は儒者と違つて戒律を守つて生活している。しかし仏典の勉強はしておらず、仏教の教えがどのようなものかを知る僧は一〇〇人のうち二、三人にすぎない。信徒は念仏やまじないは唱えているが日常生活は欲望のままに暮らしている。教えが実践されていないという点では世界最下等ではないかという。

厳しい物言いであるが、敬虔なキリスト教徒の品行方正な生活ぶりと比較しての感想である。実記の記述は客観的事実と久米の論評を分けて書くという形式が取られている（久米の論評は一字下げで記されている）。引用したのは論評部分で述べられていることである。

この書き方は一見仏教すべてを批判しているように見えるが、そうではない。むしろ、僧侶の生活は儒者と異なり戒律を守っていると僧侶を肯定している。批判しているのは信徒の生活である。この信徒は江戸に住む庶民を指しているであろう。「其品行ノ人民ニ著ルヽ度ヲ論スレハ、世界ノ最下等ニオルト謂モ、恨ミナカルヘシ……」とはきつい表現だが、スリランカの人々の無欲な暮らし、またアメリカのキリスト教徒の品行を守つた暮らし、その双方が久米にここまで強い批判をさせるのではないだろうか。実記は帰国後書かれているので、スリランカ視察で得たものの方も見方も影響している。

僧侶が經典を勉強していないという見解は、スリランカの僧に対しても述べられていたので、博覧強記の久米の眼から見ると、僧侶の知識は貧弱に見えたのであろうか。

明治二二年、帝國大學文科大學教授となる。それまで勤務していた臨時修史局が史料編纂所と名称を変えて帝大に設置されたためである。翌年、帝大に国史学科が新設されると、重野安繹、星野恒の三人で歴史学という学問の体系を整え始める。久米は古文書を精査し実証主義的方法を用いてそれまでの定説を覆していく。久米の論文が明治二三年から活発に発表されはじめるのは、修史局（史料編纂所）勤務から大學教授へと職務が変わったためである。仏教についても論文の中でそのときどきのテーマに合わせて言及されるようになる。仏教を研究対象として歴史的見地から扱い始めたのもこのころからであろう。

明治二三年に発表された「時代の思想」で、仏教がなぜ廃れていったかが語られている。

「足利時代までは仏教の崇信甚篤し。徳川代性理学の流行につれて廃仏論は起れり」性理学とは宋学、または理学とも呼ばれ、幕末武士のものの見方を支えた学問である。理詰めで考える学問が受け入れられていくに従って、理とは遠い仏教が廃れていく。久米が生まれたときはすでに仏教は淫祠であり、性理学が学ぶべき学問であった。

古文書を解読して実証的に歴史を研究し、それまでの定説を次々に覆したのも、理詰めで考える学問手法が身に付いていたからだ。「抹殺博士」と呼ばれた重野安繹の陰に久米ありと言われたのも、久米の研究手法としてその方法が徹底していたためであろう。仏教に対する偏見はその研究方法によって払拭され、新しい仏教観が研究が進むにつれて更新されていった。

明治二四年に発表された「神道は祭天の古俗」では「日本は敬神崇仏の国なり」とし、敬神は日本固有のもの、それに外国から伝えられた仏教が加わり、合わせて政道の基本となったという。それは聖徳太子の憲法十七条に始まって大化の改新で定着したと述べている。

明治二六年の「史学の独立」では、武士道の根源は仏教だという見方が出てきている。

仏教が信仰されるようになってから武力が弱くなったと言われるが、そうではなく、昔の野蠻殺伐な遺俗がなくなってきたからそう見えるだけにすぎない。武士道は仏教から出たものである。天台真言の中から発生し、鎌倉以後に禅学を

修めて発達した。儒学には心気鍛錬のくふうはない。武芸の伝書を見ると皆仏典を引用している。⁽²⁶⁾

佐賀藩の武士であった久米が、その根源に仏教があると言っている。淫祠という見方から始まった仏教が、自分の依って立つ武士道の根源を支えているものだった。さらに同論文で、日本での徳義の源は神仏儒の三つだとし、これを推し究めれば、「仏教≡宗教」「神、儒≡政治」の二色になる。これらは実は一つのものであると述べる。仏教は淫祠どころか儒教、神道と並んで、日本人の徳義、つまり道德の根源にあるものだと主張するに至った。

また、仏教の二面性についても同論文で触れられている。それは上座部仏教と大乘仏教の違いであるが、久米はこの言葉を使用してはいない。

「……仏教は厭世的で有為の氣力を失ふといふ人がある。夫は世捨人のできること、譬へば西行法師、吉田兼好のやうな人をいふのであらうが、是とても仏教の華と賞翫せねばなりません。仏教は常にか様な人を養成するでないことは、天台真言を開いた桓武天皇を厭世的といはれます歟。院の政を始めた白河天皇も仏教を大御信向である。…後醍醐天皇の晩年などは、少しは厭世的になつて下さるならば、世の騒ぎも少しは静まろうと思ふ程なれば……」

明治四一年に発表された「神道の話」は、何度か引用したとおり、久米の宗教に対する総括的な思想が語られている。

五 おわりに

以上、スリランカ体験を中心に久米の仏教観を追究してきた。もとより久米の仏教観をこのような小論で書き尽くせないことは承知の上であるが、スリランカでの体験が仏教に対する偏見を払拭する一助となり、研究対象として仏教を捉えなおすことに役立ったことは明らかにできたのではないだろうか。

久米はスリランカに降り立ったときの印象を「山緑リニ水青ク、植物ハ栄へ、土壤ハ腴ニシテ、空氣ノ清キ、景色

ノ美ナル、歐洲ヨリ来リテ、此景象ヲ見レハ、真二人間ノ極楽界ト覺フカ如シ⁽²⁸⁾と書き記している。米欧と比して物質的には豊かではないが極楽界を感じさせる国、それがスリランカであった。この第一印象が仏教寺院に行ってみようかという動機になったのかもしれない。

帰国後の久米の論文には仏教に限らずキリスト教や神道、そして普通名詞の「宗教」が付いて回っている。実記での宗教取調べ掛りという役割は、久米に宗教という生涯をかけて取り組むテーマを与えたのかもしれない。しかし、久米自身が信仰をもっていたかといえば、そうではない。久米の宗教に対する姿勢はクールで、明治四一年に発表された「神道と君道」で、自分は無宗教であるとして冷静すぎる考えを述べている。要約する。

「人は困難な運命にあつたとき、迷いが出る。神という観念は日本の教えの教本、政本一に挙げてこうしたことに対処する方法である。では、私はいかなる宗教に帰依するかというと、今の宗教はただ形式が存在しているのみである。ゆえに一定の仏教や神道に帰依したり、その説明を聞いたりはあえてしない。要するに私はいちずに歴史について神意を観察せんとするのみである」⁽²⁹⁾

久米は観察者の立場で、宗教を基軸として世の中の移り変わりを見ていたのである。その基軸を作り上げたのが岩倉使節団で経巡った国々の宗教の諸相であつたろうし、中でも特異な観察となつたスリランカは、久米の中に宗教と社会のありかたの関係について考えさせる触媒になつたのであろう。

〈了〉

註

(1) 条約改正も使節団の目的の一つであるが、実記とは関係しないのでこれについては本稿では触れない。

(2) 岩倉具視のキリスト教観について山崎渾子氏は「……政府要人の中でも、最も伝統的キリシタン邪宗門観をもち、その結果、神道国教政策に最も障害となるものはキリスト教である、と判断したのは岩倉具視であつた」(『岩倉

- 使節団における宗教問題』五五頁、思文閣出版、平成一八年）と述べ、また、副使の大久保利通と木戸孝允については、「両者ともキリスト教には関心もなく、邪宗門観においては岩倉と同じであった」（同、五六頁）、大久保については、国内の基礎が確立していない時期にキリスト教が入ってくることに不安をもっていたのではないかと指摘している。
- (3) 「神道の話」三二〇頁／『東亜の光』第四卷第五号、明治四一年／『久米邦武歴史著作集 第三卷』所収、吉川弘文館、平成二年。
- (4) 『特命全権大使米欧回覧実記 二』二五四頁（ルビは省略。実記からの引用については以下同）、岩波書店、昭和五三年。
- (5) 『佐賀藩海軍史』三八四頁、知新會、大正六年。
- (6) 同。
- (7) 同、二五五頁。
- (8) 拙論文「久米邦武の幸福論」／『まこと』と「救世主」―久米邦武の比較文化論』所収、知玄舎、平成二五年。
- (9) 『特命全権大使米欧回覧実記 五』二八二頁、岩波書店、昭和五七年。
- (10) 同、二八三頁。
- (11) 同、二八四頁。
- (12) 同、二五五頁。
- (13) 同、二八五頁。
- (14) 同、二八六頁。
- (15) オルコットはスリランカでは仏教復興の祖として尊敬を集めており、スリランカ最大の都市コロンボには銅像が建てられている。

- (16) 『特命全権大使米欧回覧実記 五』二八六頁。
(17) 『特命全権大使米欧回覧実記 一』一二頁。岩波書店 昭和六三年。
(18) 『神道の話』三一九頁。
(19) 同、三二〇頁。
(20) 同、三二二頁。これは久米だけでなく、そこに集まった人々の会話の中から出てきた言葉である。当時のインテリの総意だと考えてよいだろう。
(21) 「史学の独立」一二頁／『史学雑誌』第四編第四十五号、明治二六年／『久米邦武歴史著作集 第三卷』所収。
(22) 同。
(23) 『特命全権大使米欧回覧実記 一』三四四頁。
(24) 「時代の思想」／『史学会雑誌』第一編第二号所収、明治二三年／『久米邦武歴史著作集 第三卷』所収。
(25) 「神道は祭天の古俗」二七一頁／『史学会雑誌』第二編第二三～二五号、明治二四年／『久米邦武歴史著作集 第三卷』所収。
(26) 要約。「史学の独立」一一頁。
(27) 「史学の独立」一二頁。
(28) 『特命全権大使米欧回覧実記 五』二八三頁。
(29) 「神道と君道」三三三頁／『開国五十年史 下巻』明治四一年／『久米邦武歴史著作集 第三卷』所収。